

第1490回（2月5日）

環境という考え方

渡 辺 兵 力

環境論的考え方というものを、科学研究の一思考法として提唱する。従来の科学研究思考法が部分的・合理主義的であるのに対して、この環境論的思考法は総合的・生命主義的であり、従来の考え方を補完するものと位置づけられる。

環境論でいう環境とは、主体的人間が「生活」していくうえで常に相互作用関係をもつところの全ての外界的存在であり、外在性、同時性、内外性、条件性、資源性の各要件を満たしている。また、環境論においては、生きる主体（生物）とその生活様式全体の理解を思考法の基礎においている。人間主体に関していえば、環境論では、生物進化の過程で文化を背負い一般生物と異なる半自然・文化的存在として捉えられる。

主体・Xとその環境・Eとの間には機能的連関、相互的作用関係が成立している。その基本関係は $X \rightleftharpoons E$ で与えられる。これを環境的關係と呼ぶ。

$X \rightarrow E$ （Xの対応、環境への働きかけ）

$X \rightarrow E$ （Xの適応的対応）

$X \rightarrow E$ （Xの改変的対応）

$X \leftarrow E$ （Xの受領、環境からの受取り）

$X \leftarrow E$ （XがEを内在化する）

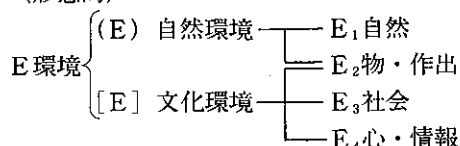
$X \leftarrow E$ （XがEを資源化する）

環境的關係は、システム・系と考えることができ、Xの入力に対して、Eは出力で対応する環境的機能を有している。入力の如何で出力は変化し、環境の構造が変わればその機能も変化する。人間主体の諸行動は、通常何らかの社会を作り、言語と技術を手段として遂行される。したがって、環境的關係の実態は文化現象であり、文化の視点が重視されねばならない。

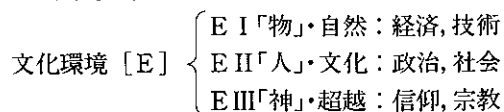
人間環境・Eはきわめて多種多様な環境系

によって構成されている。

（形態的）



（対応的）



E₁～E₄、E I～E IIIは個別にXと関係しているのではなく、各環境单元、要因がそれぞれ相互に関係合って総合的に作用しているのが実態である。事実、今日の環境問題では各单元、要因の相互的関連が問題になっている。従って、その要因のもつれを整理することは環境研究のひとつの重要課題である。

以上の思考法をさらに展開させれば、風土的環境や環境観という概念を得る。前者は、ある場所の自然・(E)と文化・[E]との相互関係を示すものであり、生活様式における(E)と[E]とに規定力を指標に文明化、近代化の程度を知ることが可能となる。

後者の環境観とは、生活主体・Xの外界に対する知覚ないし認識によって形成された思考体系を指す。ほぼ同じ環境の中で「生活」する人間は類似の環境観と生活様式とを有するので、そうした固有の環境観の解明が待たれる。その一例として、農村社会における土地観の解明は、農業問題の研究において最も重要な課題のひとつと考えられる。

（文責・水野正己）